

ア) 徳島の代表的な湧水・利水に関する防災風土資源の事例

① 袋井用水と楠藤吉左衛門（徳島市）（表 6 の番号 1）

徳島市鮎喰町には徳島県指定文化財の史跡の袋井用水水源地（写真 1）には楠藤翁頌徳之碑（写真 2）がある。徳島市鮎喰町二丁目、「上鮎喰」バス停のすぐ東側に流れているのが袋井用水である。

そこに往時の水源地跡を示す案内板があり、それには、名東郡島田村庄屋・佐藤吉左衛門（のちに楠藤に改姓）が、旧島田村・庄村・蔵本村（約三百町歩）の水不足に悩む農民の姿を憂い、元禄五年（1692）から元禄十二年（1699）まで、約七年をかけて袋井用水を開削したとされている。また、現地看板（写真 3）には袋井用水普請図が描かれている。



写真 1 袋井用水水源地

写真 2 楠藤翁頌徳之碑

写真 3 袋井用水の現地看板

四国三郎物語（建設省徳島工事事務所平成 9 年 3 月発行）には、藩政時代最大の美挙として、楠藤吉左衛門（なんと きちざえもん）の水源地探しのエピソードを次のように伝えている。

「水は必ずある。掘れば水は出る。水源地はきっとできるという確信を持っていた。それは庄村から蔵本村へかけてもと佐吉川の流れた跡が残っていて、ところどころにガマやアシなど水辺に育つ草が生え、ところどころに水溜りができていることを知っていたからである。吉左衛門は昼間ちょっとでも時間があると鍬をかついで外出した。そして地面の低い水が出そうだと思うようなところを目あてに掘ってみる。夜は夜で黙って家を出るところかまわず寝ころんで地面に耳をあてた。もしや地面の下で水の流れる音が聞こえはせぬかと一心不乱に夜遅くまで探しまわるのである。村の連中は「庄屋の旦那は気が狂った」と噂し合うようにさえた。だが、吉左衛門は毎日、水源地探しに夢中になった。そしてあるとき、吉左衛門は上鮎喰往還の南方堤の下に水が少し湧き出していてガマが生えているのを見て、昔の水脈を考え、水源地の溝となることを確信した。」、そして困難を極めた水源地の掘削として「郡奉行に願い出て幅十間（約 18 メートル）、長さ二百間（約 360 メートル）の用水堀を掘る許可をとりつけて工事に着手したわけだが、その間再三にわたる掘削許可出願に、藩は難色を示したという。

ようやく計画の半分のスケールの規模ならよしとする藩の許可を得て、勇躍として農民総動員で出役、水源地掘削工事は始まった。大量の土砂の運搬に鍬ともっこによる土木作業は難渋を極めた。待ちに待つ水はっこうに出てこない。農民の失望の色は濃い。やがて冷笑に変わって、とうとう工事現場には吉左衛門ひとりが立ちつくしていた。工事費一切を自弁しての事業—このとき、吉左衛門の胸に去来した思いはどのようなものであったろう。

『吉野川百年史』は、「しかし吉左衛門は諦めず、夜中人の寝静まったころ、彼の考えている場所にうち伏して、水の音を聞き定め、改めて又の日に、なお一尺（約 30 センチメートル）ほど掘り下げても水が湧き出ない時には、我首を奉りますと官に申し出て許しを乞い、再び穿ったところ、に

わかには水の湧くことを噴き出すように、その辺りを浸し溢れた。人々皆感動したという」と、水脈を掘り当てた臨場をドラマティックに描き出している。

吉左衛門は水路造成工事の完成の目安がついたとき、神仏への感謝の念をこめて、百か日の四国霊場五か所参りに出ました。享保五年（1720）、十五番国分寺本堂前に「結願奉納碑」を建立した。当時の国分寺跡は、史跡 阿波国分寺跡を示す図に描かれていますが、現在の第15番札所 阿波国分寺境内の**写真4**よりかなり規模が大きいことがわかる。平成9年の筆者の調査時には結願奉納碑は境内本堂向かって階段手前にありましたが、現在は、鐘撞き堂の南側に**写真5**のように移設され残されている。



写真4 第15番札所 阿波国分寺



写真5 結願奉納碑

水源地が完成したのちも、さらに三代にわたって受け継がれて水路は拡張されていきました。この楠藤家三代によって袋井用水は完成し、島田・庄・蔵本各村の数百町歩の水田は潤い、農業生産は一段と発展したのであるといわれている。

《得られる知恵・教訓》

今日に残る袋井用水水源地は、農民のために私利私欲を捨てて悪戦苦闘した楠藤吉左衛門の功績を後世に伝える資源であり、水源、水の大切さを教えている。

② 麻名用水と井内恭太郎（吉野川市）（表6の番号2）

徳島県屈指の大農業用水「麻名用水」（**写真1**）が完成したのが明治45年であり、着工が明治39年であるから、実に足かせ7年にも及ぶ大事業（**写真2**）である。吉野川の右岸（南岸）の鴨島町から石井町にまたがって、南北二つの幹線と多くの支線水路が設けられ、1,250町歩あまり（大正3年調べ）の水田を灌漑（**図1**）できるようになった。



写真1 麻名用水取水口付近写真
(平成27年3月撮影 徳島河川国道事務所提供)



写真2 大正元年の麻名用水取水樋門
(出展：徳島県立文書館、第19回資料紹介展資料)



図1 麻名用水の受益地 地図
(出展：徳島県立文書館、第19回資料紹介展資料)

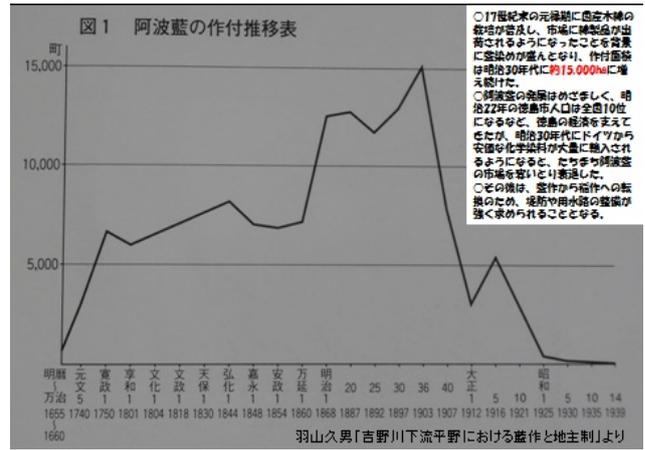


図2 阿波藍の作付推移
(出展：羽山久男「吉野川下流域平野における藍作と地主制」)

図2の阿波藍の作付推移のとおり、阿波藍が明治30年代約15,000haをピークに、ドイツから安価な化学染料が大量に輸入されるようになると、たちまち阿波藍の市場を奪いとり衰退し、その後は、藍作から稲作への転換のため、堤防や用水路の整備が強く求められることとなった。吉野川の明治40年からの第一期改修や麻名用水がその整備である。

幕末から明治にかけて、吉野川の利水を提唱した人に、後藤庄助、庄野太郎、豊岡荔墩らがいました。彼らは吉野川流域に大規模な用水路を開削することにより藍作から米作への転換をはかり、農業経営を安定したものにしたいと願っていたが、彼らの壮大な構想は容易に実現には至らなかった。

井内恭太郎(写真3)は、明治30年、麻植郡長として赴任し、麻名用水の構想を提案し、井内らは再三にわたり用水案の実現を説いてまわったが、農民は聞く耳をもたなかった。この時の様子が麻名用水碑(写真4)に刻まれている。明治37年にこの地域一帯が大干ばつに襲われ、これがきっかけとなって、明治38年には「紀念麻名普通水利組合」が結成され、管理者に井内恭太郎が就任し工事を完成させた。のち美馬、名西郡長となり、板名用水(明治45年)建設にも努力した。



写真3 井内恭太郎銅像



写真4 麻名用水碑と当時の用水反対の様子

《得られる知恵・教訓》

麻名用水碑に「一身を犠牲として隠忍自重(いんにんじちょう) ついに今日あることを至(いたら)せり」と記されているように、計画に反対する住民と粘り強く対応した強力な指導者により社会資本整備が進んだことを教えている。